

現代日本小説大系

59

昭和十

59

昭和



日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第五十九卷

河出書房版

近代

文學

現代日本小說大系 第五十九卷

昭和二十七年四月十日
昭和二十七年四月十五日
初版印刷
初版發行

定價 貳百參拾圓
地方定價 貳百四拾圓

代著 表者

丹羽 文雄

發行者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
河出 孝雄

編集者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會
中野 重治

印刷者 東京都品川區大井寺下町一四三〇番地
小田 茂作



發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八
株式會社

河出 書房

會員番號 A-11014
電話 神田 (25) 三一七四番

東京日本印刷株式會社印刷

目次

丹羽文雄

海 戦

.....

三

石川達三

生きてゐる兵隊

.....

八

火野葦平

麥と兵隊

.....

一五五

上田 廣

黄 塵

.....三二七

日比野 士朗

吳淞クリーク

.....二八一

解

説（中野重治）

.....三五

丹羽文雄 海 戰

第一章

寒いなと感じて、目をさました。薄い毛布一枚では夜明けの冷気がふせぎきれなかつた。金網の窓のそとはほのかに夜が明けかかつてゐた。蚊帳のなかの友達をながめやる。一つの蚊帳に三人づつ寝てゐるが、ほかの二人も毛布にすつぱりと首まで包んでゐた。からだの線がいかにも寒さうに見えた。赤道を南へ四度の土地だが、夜明けの冷気は内地の五月をしるばせた。曉ごとに私はおどろいてゐる。しかし晝間の、かつと照りつける太陽にあふと、朝ごとのおどろきは忘れてしまふ。毎朝私は新鮮なおどろきをくりかへした。ここの氣候は内地と半年おくられてゐて、八月のこの基地は冬季にあたる。乾燥期といはれてゐるが、樹々はしげり、佛桑華や印度せいの花が咲き、果物はいつでも食べられる。私はこの基地の氣候をひとりでをかしがりながらこつそりと當惑もしてゐた。着いてから一週間目であつた。私は再びねむりに落ちた。

「さあ起きた、起きた」

たれかの聲に急いで牀をはなれた。木麻黄の並木には軍用トラックが疾走してゐた。すでに晝間の活躍がはじまつてゐる。私は二枚敷いてゐた毛布と、かけてゐた毛布を四つに折つて、それから蚊帳を外した。

「今日の掃除當番は、たれだ」

「N社ぢやないか」

「今日はとくに念入りにたのんだよ」

さういふ會話を聞きながら、蚊帳を折目正しくたたんだ。新

しくて麻の香りと染料の青い色がすがすがしかつた。海軍報道班員宿舎には十二人ゐた。新聞社のA社、N社、Y社、D社、それに日本映畫のニュース・カメラマン二人、洋畫家と私であつた。各社とも記者と寫眞部員の二名があるのだから、私と洋畫家が一つ組となり、掃除は六日目ごとにまはつてくるが、私はまだ一度も當番の日にあたらなかつた。當番番組が決定したのが二三日までであつたからだ。二町ほどはなれた第八艦隊根據地の食堂から、従兵の食事をしらせる鐘が聞えてきた。

顔を洗つたものからぞろぞろと食堂の方に行く。私は火山灰のとけこんだ雨水をためた大きな紅殻塗りのタンクから、のこり少ない水を出した。タオルはすでに煮つめたやうに汚い灰色になつてゐた。

この朝の料理は、なまりの煮付、味噌汁、新香であつた。野菜は當地でつくつてゐるので、一夜漬の食慾をそそる青い色をしてゐるが、私はだんだんと食慾を失つていつた。その頃には食堂にそろふ海軍士官の顔や、民政部員の顔も覺えられるやうになつた。

「雨がふつてくれなやかなあ」

「昨日降つたぢやないか」

食堂からのかへり、私の歩いていく前にそんな會話があつた。

「降つたといつたつて、あんな思ひきりのわるい降り方なら、いつそ降らない方がましだ」

「仕方ない。今は乾燥期だ」

「いや、タンクの水が残りすくなくなつてゐるからさ。心細い

んだ」

「ああ洗濯か……」

今日はひとつ洗濯をしてやらうと私は思った。食堂から宿舍まで小さい原っぱがある。草がはえてゐるが、ほとんど火山灰に埋まつてゐた。靴をおろすたびに黄色のへんに重げな煙が立ちあがる。靴は一ト足おろしただけで白くなつた。私の歸も服も、唇の上までざらざらとなつた。せめて宿舍にゐる時ぐらゐは清潔な氣分であつたものだと思へる。喉の乾きのやうに私を苦しめるのである。しかし開つばなしな宿舍では、木麻黄の並木をトラックが走るたびに、砂ほこりが音をたてて舞ひこんだ。原稿紙の上に一トかたまりになるほどのほこりがたまつた。宿舍の階段のところで私は立ちどまつた。道路をこえた巨木の下で陸戦隊が艦上體操をやつてゐた。内地ではちよつと見かけない、ひどく努力のいる體操であつた。私はいつかこれを覚えてやらうといふ氣があるので、手のあげおろしの順番を諸記しにかかつた。いまは腹がくちいので、ついで體操する氣がおこらない。ぼんやり見物してゐると、そんな見物がだんだんと兵隊に悪いやうに思はれてきたので、宿舍のバルコニーに出て、こはれかかつた籐椅子に腰かけた。

もの凄いい爆音で宿舍の屋根をふるはせ、おさへつけて、唸りながら飛行機が編隊でとんでいつた。モレスビー爆撃だらう。たれもそのことを口に出さない。陸戦隊の一分隊の兵が武裝をして、木麻黄の並木をつきつた。原っぱに出ると、伏せをした。トラックが走る。司令部の自動車は砂煙をまいて走つた。原住民をのせた大型のトラックが十字路を曲つた。陸戦隊

の演習は猛烈に行はれてゐる。

「ニュース、聞いたか」

ニュース・カメラマンの畑谷が深刻な顔をして宿舍に戻つてきた。めいめい勝手な姿で、一尺ほど高く板を張り、その上に疊をしたところで休んでゐたが、なにといふ風に顔を向けた。

「ツラギに敵が上陸したんだ」

「ツラギ？」と一人が思はず言つた。

「あそこには陸戦隊が少しゐる筈だ。それに對岸のガダルカナルにも陸戦隊がちよつとゐる筈だが。そのニュース、たしかなんだね」Y社の志田記者が床を鳴らして、畑谷のそばによつてきた。「すててはおけないぢやないか。いつたにどうするんだ」

畑谷は一同の顔を見廻して、ゆつくりと、

「これから司令部へいつて、様子をきいて來ようぢやないか。自分たちの仕事もきまるかも知れないから」ふだんから血色のよくない顔をいつそう貧血させたやうに見えた。が髭や肩が濃いので、生地の新白さはそんなに目立たなかつた。

私はバルコニーから、宿舍の裏手の鐵條網をくぐつて、出ていく志田と畑谷とA社の堺記者、ニュース・カメラマンの圓山の姿を見送つた。やがて彼らは十字路を左に折れ、司令部の方へゆつくりと歩いていく。朝起きた時から疲れてゐる人のやうな歩き方であつた。大きな運命の方へ、それと氣付かずに歩いていく歩き方であつた。私は敵のことを考へると、血の中に不純な息苦しいものがまじつて、それが血管を押しひろげて流れたのを感じた。私はツラギのことをよく知らない。知らない

ければ、いくら切ながらうと仕方がないではないか、と自分に言ひきかせて立ちあがり、私にあてがはれた洋軍筒から半袖半ズボンと靴下と下帯を取りだした。午前中に乾く豫定で、階段脇のタンクの前に陣取つた。心細い雨水が大きな洗面器に半分までたまるには時間がかかつた。洗濯をはじめると、ツラギのことも、司令部にいつた友達のこと、意志も忘れて、洗濯だけの人間になつた。

「だうりで、ボーイングの奴、この頃しよつ中來ると思つてたら、ツラギまで來てたんですね」

私は石鹼の泡をとばした顔をあげた。D社の若い寫眞部員の鹿川がそれでわかつたといふ顔をして、そばに立つてゐた。彼は私より十五六も年少者であつたが、すでに二人の父親であつた。

「敵の様子はよく判らないから、何ともいへないけど、モレスビー攻撃の牽制の意味もあるんぢやないか」
「多分さうでせうね」

私は洗濯してゐるのがふいにいやになつた。いい加減にやめて、絞り出した。麻の半袖半ズボンは水にひたると、別物のやうに濃い褐色の服になつた。

「僕らはここへ着いた日から、空襲されましたからね」

「晝も夜もきた。相當しつこかつたな」

「今日あたりもやつてくるんぢやないですか」

「来るよ、きつとくる」

さう言つてゐると案の定、十時半頃空襲を知らず空砲が三發づつて鳴つた。表にとび出すと、ボーイングが十三機、山形

に編隊をくみ西から東に、高度八九千米をとび去つた。飛行場を爆撃に來たものらしかつた。

晝食後、食堂の従兵があらためて圓山を呼びにきた。司令部から電話だといふ。圓山がツラギの敵を撃ちについていくことは午前中の司令部との聯絡で決定したが、ほかにたれがいか、くはしくはきまらなかつた。はつきり指名がないので、みな仕事に手がつかなかつた。たれもかれもし自分が命令されたときのために荷物を整理してゐた。

間もなく圓山が戻つてきたが、入口のところで、

「ツラギにいく報道班員が決定した」と言ひ、最初に私の名をあげた。「それからA社、Y社、それに僕の六人だ」

その時私は小さい机のまへにあぐらをかいてゐたが、この人選に自分がいふことは初めから判つてゐたのだといふ氣がした。内地を發つときから何かと私の面倒をみてくれたY社の志田記者と目を會はせ微笑しあつた。自分で自分の微笑の會心ぶりを意識してゐる笑ひ方になつた。私は發散していく音楽をうまくとらへたやうな氣さへした。

「あとのものは、どうなるんだ」と畑谷が言ひだした。

「命令はそれだけだ。いま言つた人は荷物をまとめて、至急司令部に來てくれつて」

よくよく洗濯などしなければよかつたといふのは悔いた。艦の中では着換へのないのは困る。私は司令部から借りた艦内の防暑服を着たきりであつた。防暑服も汚れてゐた。人間は自分の上にまはつてくる運命を正確に豫知しながら、ときどきまるでそんな運命には氣がつかないやうに運命とは反對にふるまひたが

るものだと皮肉に思つた。洗濯の悔いはどうにもしやうがなかつた。私はトランクとボストンバッグを開け、必要なものを最少限度にととのへてトランクを下げた。A社の堺と毛利寫眞部員は社から給與された大きな袋を肩にかけた。

「出かけようか」と私は堺に言つた。

「しつかりやつて来て下さい」

鹿川が人なつこくそばに来て、私に言つた。私は微笑でうなづいた。

裏手の鐵條網はくぐつてはならないことになつてゐた。あたりまへのことだが、ここをくぐつて司令部にいくのと、正門から出ていくのとでは距離も時間も三倍かつた。私はトランクを肩にのせ、一ト足ごとに火山灰が立ち上る道をゆつくりと歩いた。志田と箕輪は一ト足おくれた。堺も毛利もへんに黙つてゐた。リュックサックが重いのであらう。私は、毎日の日課の一つをやつてゐるやうな心の平靜をおぼえた。海戦といふ私にとつては生れてはじめての經驗をひかへながら、この心の落着きはかへつて異常であつた。海戦の正體を知らない私は海戦でまきおこされる混亂や熱狂の中におりていくいき方がわからなないのである。しかし曖昧さは覺えず、無見當な心のさわめきも感じなかつた。私の足は道路から司令部の玄関まであたらしく敷きつめた黒い石炭敷の道を歩きにくいところばただけであつた。

司令部の玄関をはいつて、壁際にめいめいの荷物をおいた。

司令部は何となく全體があわたしかつた。命令される聲には殺氣が感じられた。次から次に車が士官をはこんでいつた。私

たちは器用に、あわたらしい殺氣立つた空氣のなかにはいつていくことができなかった。士官や下士官の顔を漠然と眺め、その内には向うから氣付いて、何か命令をあたへてくれるであらうとあてにした。しかしなかなかたれにも私はとらへられなかつたので、室内にはいつた。顔見知りの大佐が作戰室から出てきた。私は艦上でのやうに舉手の禮をとつた。大佐は私に氣付かず、心もち天井を眺め、頭の中の熱い思考に憑かれた人のやうにすれちがつた。作戦だけでいづばいであり、私の顔が見えなかつたのだと、ことの容易でないことが理解された。報道班員などには目をくれる餘裕もないのだ。いよいよ私には、とりつくしまがなかつた。A社の堺と毛利は無神経な顔をして、命令を待つてゐた。待つことに慣れてゐるやうであつた。私は待ちかねて貰ひに向向く方であるが、この二人は辛抱づよくたれかの目にとまるのを待つてゐる。さうだ、この二人は軍人だつたと私は思ひ出し苦笑した。堺は大陸で四年の餘もはたらいてきた陸軍中尉であり、毛利も北支で苦勞をした上等兵であつた。ふだんから二人は口數が少なかつた。私とだけは親しく口を利いてゐたが、口數少ない日常生活には軍隊の名残りが多分にくこつてゐた。口の悪い畑谷は堺のことをガンヂーと渾名をつけた。少し肥えたガンヂーだが、私よりも七つ八つ年下のくせに頭髮がうすく、小さい銀ぶちの眼鏡をかけてゐた。煙草は吸ふが、酒は一滴ものまぬ。やはらかい話になると興味索然とした顔になつた。變人だと言はれるのも仕方がなかつたが、本人はガンヂーと渾名をされてゐるのを承知なのか、だまつてゐた。だまつてはゐるが、存在だけはしつかりと主張してゐた。

大陸ですごした永い年月の間、一度もあやまちをしなかつたといふ。そのことをまるで人前には氣まりの悪い病氣のやうに私にもらした。軍人の生活にあつては堺のやうな志操堅固はめづらしくないであらうが、娑婆に出るとガンダーとことさら呼ばれなければならなかつた。毛利寫眞部員は、二年の大陸戦線、上等兵で渡つて戻つてくるときも上等兵であつたといふ變りものであるが、原住民が殺しかねてゐる仔豚を一撃のもとになぐり殺して、私をびつくりさせた。頑丈な肉體をもつてゐた。額がひろく抜け上つてはゐるが、獨身で、堺より年下であつた。上等兵が中尉に對するやうに毛利はいつも堺から訓戒されてゐた。仕事の上ではもちろんこの土地の歴史や風土を教へられてゐる場合にも、毛利が聞いてゐると訓戒されてゐるやうであつた。毛利も訓戒の形式で話をきくことがよく似合つた。

作戦室から副官が出てきた。

「ご苦勞さんです。まつ先にあなたにいつていただくことになりました」

私は黙つて感謝を示した。

「あなたとA社の記者と寫眞部、それに圓山ニュース・カメラマンの四人は、私たちと一しよに鳥海に配乗してもらひますよ」

「鳥海ですか」と私はなつかしい軍艦の名を言つた。わき立つやうななつかしさを覺えた。私たちはその軍艦で呉を發つた。わづかの航海であつたが、その間に私は艦内生活にも、海にも慣れ、士官たちとも親しくなつた。私は士官室にあつまる士官の顔を一つ一つ思ひうかべた。彼らに歓迎されることは判つて

ゐた。

「鳥海が旗艦です」

「それちや司令長官もご一しよですね」

「さうです」

「敵の様子はどんなですか。私たちには何もわからないので……」

「昨日の偵察によりますと、敵は空母一、戦艦一、巡洋艦四、驅逐艦多數、輸送船も二十隻以上といふ報告でした。明日の夜夜襲をかけるのです」

副官はさう言つて、にこにこしてゐた。陽に灼けて、いかにも艦上生活者らしかつた。私たちは呉を發つとき、この司令部と一しよであり、はじめて副官に逢つたときは、色の白い、若しい美青年ぶりにおどろいた。私の顔や腕半分、脚は灼けて、皮が一枚むけてしまつたが、副官も灼けて、逞しい美青年に變つた。それでゐて副官らしく神經の細い、柔軟性を感じさせた。從兵に對してはときどき高飛車な言葉をあびせかけることもあつたが、口調のあらあらしいのは、この世界の習慣であり、副官の場合は育ちのよい家庭の子供がわざと亂暴な口をきいてゐる風に見えた。

「十五時出ですから、それまでに鳥海に乗りこんで下さい。棧橋には、鳥海の内火艇が迎へに來てゐます」

「いますぐ出發ですか」

「車の來次第のりこんで下さい」

私は堺と毛利のそばに戻つて來て、

「明日の晩は、夜襲をやるんだつて」とトランクを持ちあげた。

二人は上官に對しては個人的な感情を顔に見せてはならないとよくよく訓練された昔のやうに、黙つてうなづいた。リュックサックを片肩に吊して、私と並んで玄關の階段に立つた。自動車は次から次に士官をはこんでいつた。石炭穀の軋る音と、砂ほこりが残つた。空は晴れてゐた。樹木はもういやになるほど青々と繁つてゐた。佛桑華は赤く咲くより能がない風にのべつまくなしに赤く咲いた。いかだかつらの一ト群が忘れられたやうに司令部の陰に咲いてゐた。

「Y社の連中、おそいな」

「僕ら、先にいきませう」と毛利が言つた。

「あの連中は、何にのるのかな」堺が訊く。

「僕らと一しよぢやない」

そこへ副官が出てきて、

「報道班員は全部のりこむことになりましたから、支度して、十三時までには棧橋に來るやうに言つて下さい」と言つた。

毛利が命令傳達にいくことになつた。

何臺か車をやり過した。やつと二人分あいてゐる自動車が始つてきた。

「毛利君を途中で拾ふつもりで、出かけよう」と私はすでにのりこんでゐた二人の中尉に目禮して、のりこんだ。士官らはよこれめのない白服で、膝のあひだに大きな刀を立ててゐた。私はトランクを持ちこんだが、軍刀に對してをかしな對象になつた。堺は助手臺にのりこんだが大きなリュックサックを膝の上にする本人が埋まつた。毛利のリュックサックはエンゼンカパーにのせた。士官二人は輕々しい装ひであつた。誇りと戦ひ

の二つを持つてゐるにすぎなかつた。私たちの服裝には威厳がなく、覺悟の曖昧さと荷物の仰々しさが比較されて、車内でも不均衡であつた。私は何となく羞しくなつた。何かを冒瀆してゐるやうで氣がひけた。

途中で毛利を拾つたが、のりこむところがなく、毛利はステップに立つた。

「あとの連中、あわてて支度してゐますが、十三時までには間に合ひますか、危いものですな」

十三時があと十分に迫つてゐた。宿舎から棧橋まで駈足でも十分はかかつた。うまくトラックでも借りられたならともかく、私は間に合ふまいと思つた。車は警笛を鳴らして、道幅のゆつたりとした、樹木の多い、その間に赤い屋根の點在した風景を兩手からすべり落すやうにして走つた。

港内には軍艦島海がこちらに艦首を向けて待つてゐた。棧橋にはボートが待ちかまへてゐたので、いきなりそれにのりこんだ。圓山は先にきてゐた。

「Y社の連中は、どうしたんだらう」それが唯一つの私の氣がかりであつた。

「あとから來るだらう。艦がちがふんだ」

軍艦にのりこんだが最後、死生は個人の意志のままにならないう運命をまへにして、いまだ度志田や箕輪の顔が見ておきたかつた。私ははしりだしたボートからのび上るやうにして、棧橋の人々を物色したが二人の姿は見えなかつた。死の別離はいつもこんなに無造作に、あつてなく過ぎてしまふものだといふ氣がつよくした。ボートが接近すると軍艦島海はくろがねの巨體

をおしかぶせるやうに迫つた。はなれてみるとこの艦はスマートであるがそばによるとそんな印象は消しとんでしまふ。むやみと巨體であつた。しばしの航海で慣れた筈の私の神経が、初めての時やうに壓迫をうけた。兵は用心ぶかく舷梯にボートをよせた。ロープが投げられた。私は何人目かのあと、トラシクを下げて、舷梯の格子板を踏んだ。そのとき私の運命は決定した。舷梯の階段を一つ一つふんで上つていくとき、自分の氣持が宿舍にあるときと少しも違つてゐないのに氣がついた。ちよつとどこかに出かけるといつた心の輕きであつた。期待してゐた昂奮もおぼえなかつた。あまり何でもな平靜な心境なので、これでよいものかと疑つた。功名心に燃えることもなく、危険をかしにいくのだといふ強がりも覺えなかつた。私は海戦といふものをどう解釋していいのか、その心がまへが出來てゐないせゐかとも思つた。己の生命を全うすることはもはや不可能であり、生命の與奪は艦の運命に思ひきりよくあづけてしまつたのだといふことは自分にも判つてゐた。が空しくなつたそんな己の存在がとくに鮮明に心にうかんで來ないのはどうしてだらうか。何か曖昧であつた。

「やあ、また來たんですか」

舷門のそばにゐた機關長が微笑で私を迎へてくれた。

「またご厄介になりましたか」

そこには水雷長の顔もあつた。甲板士官は微笑で舉手の禮をした。軍醫長の顔もあつた。

「どうでしたか、陸上は？」と軍醫長がいふ。

「水に不自由しました」正直に應へた。

「やつぱり艦の方がいいでせう」

艦内生活は暑さだけが苦手だが、その點以外は陸上の生活とはくらべものにならなかつた。清潔にしてゐられることが何よりであつた。水雷長は眼窩の大きくくぼんだ瞳で、私の顔を見守つた。癖で、話したすときは、いつときやさしく正しく相手の目を見てから水雷長は口をきいた。水雷長は短くなつたやうな防暑服に、潔癖をあらはしてゐた。

「ほかの連中は、どうしました」と軍醫長が訊いた。

「Y社の二人は、別な軍艦にのりこむことになつてゐますが、その他のも、配乗することになりました。この旗艦には、僕ら四人です」

私たちは荷物を一ト先づ士官室にはこぶことになつた。トラシクを下げて甲板を下りていくと、士官室の入口で從兵たちに出會つた。彼らは舉手で迎へた。この兵たちとも呉を出るときから一しよであつた。

士官室は、まへと少しもちがつてゐなかつた。二三人の士官が甲板の暑さを避けて休んでゐた。

「またご厄介になります」

「いらつしやい。どうでした、陸上は？」と機關中尉がいつた。

「バナナとパイは、ふんだんに食べました」

笑つて應へたが、それ以外には陸上でよかつたと心に残るものは何一つなかつたやうに私は思つた。荷物は隅に片寄せた。

圓山はまづ先に氷水をのんだ。士官室にはしよつ中氷水が用意されてゐた。その長いソファに腰かけて、私はもう一度自分ののはつきりとしな胸の中をふりかへつた。覺悟らしい覺悟の

ついてゐないのがかへつて不安であつた。周囲のものに對してそれではすまない氣がした。私は覺悟といふものを何か固體のやうに考へてゐたらしい。頭ではさうは考へないのだが、さがしまはる私の焦躁では何かそんなものを求めてゐたやうであつた。いい加減な自分であるやうな氣もした。いや、自分は自分のなすべきことをきちんきちんとやつてゐればよいのではないが、軍人をまねる必要はない、自分の義務を果せばそれでよいのではないかと平凡だが、これ以上の回答はうかんて來さうになかつた。平凡だが、それでいくらか氣持は輕くなつた。

甲板に出ると、内火艇がさかんに棧橋と艦の間を往復してゐた。空は爆音で埋まつてゐた。味方の戦闘機が亂舞のやうにとびまはつてゐた。山の上を大膽にとびまはつた。あそこだけは氣流がちがふのではないかと氣をまはしてみたが、戦闘機の輕快な飛翔ぶりと爆音には、山の方で氣がねしてゐるやうであつた。たうとう志田と箕輪の姿は見付からなかつた。

「やあ」と元氣に聲をかけて、飛行長が近づいて來た。「あんたたちまた來たんですか」

飛行長は妙な舉手の禮をとつた。右の掌を掬ふやうにくぼませて、くぼみで鼻をおさへるやうに、二三回つづけさまに顔のまん中をおさへる舉手の仕方であつた。私たちに特に示す愛情の表現であつた。

「廉治さんに逢ひましたか」

「廉治さん？ ああ、江田さん？ 江田廉治さん、こちらに來てたんですか」内地にあるとき、二三回宅に來たこともある飛行長大尉であつた。飛行長はその江田大尉に教へられた生徒であ

り、初對面のとき江田廉治の名前を飛行長が口に出したとたんに私と飛行長は急速に親しくなれたのである。「あなたのことは、内地にゐたときから江田大尉に聞いてました」さう飛行長はそのときに言つた。

「どこにゐますか、江田大尉？」

「山の飛行場です。逢はなかつたのですね。いまごろは、死んでるかも知れません」

死の衝動よりも、死と無造作にいつてしまふ飛行長の口調にびつくりした。

「いまごろ、死んでるかも知れません」

午前中、私たちの宿舎の上を編隊でとんでいつた味方の飛行機のことを思ひだした。戦場のならひとはいへ、何とか他にもつと言ひやうはないものかと胸をしめつけられた。飛行長は二十六歳であり、私より十三も年下であつた。飛行長の斷定は慰めとか、否定とか、それに類した答へを求めてはゐなかつた。

飛行長の斷定は一つのいさぎよい自分に向つての宣言であり、それに應じる答へはすでに自分のうちにこもつてゐるのである。冷酷に感じられるほど戦場の眞實であつた。二週間たらず

の交際であつたが、私がこの飛行長を理解したつもりでゐたのは、彼への一つの道程にすぎなかつたやうである。私はこの二十六歳の青年大尉をほんたうに理解してゐなかつた。とつさのおどろきが克服できなかつた。そのくせ飛行長は率直に、簡單にものを言つたにすぎなかつた。二週間でこの青年と精神の融和を感じあつてゐたことが、ごく表面のことにすぎないと判つた。このことはひとり飛行長だけに限らなかつた。航海長に對

しても、水雷長、機關長、砲術長に對しても、私の知つてゐるのはごく一部分であつた。ほんたうに彼らと精神の融和を感じるには、突發事件でか、それとも永い時間をかけるかしなければならぬやうに思はれる。しかもその融和の場所は非常に偉大な場所で行はれるといふ氣がするのである。私は明日の夜襲を思つた。死生を共にするといふことが果してどのやうな人間味を味はせてくれるものか、私は千載一遇の好機のやうに考へられ、早くそれがためしてもみたかつた。

私たちは甲板で周圍をながめてゐた。四方を翠の丘陵でとりかこまれたこの港は、いつも靜かであつた。波うち際には椰子が倒れさうに繁つてゐた。毒々しいほどな緑の中に赤い屋根が點在するが、赤く塗らずにゐられない人間の心理は理解できた。ここではすべてがかあつと原色のままであつた。水艇がかんでゐる。半年まへに爆撃された敵船が大きな胴體を倒して、赤錆びてゐた。私が腕時計の紐を結びなほしてゐると、

「切れたのですか」

機關科士官が訊ねた。

「ハンダが取れたので、困つてゐるんです。かうして紐で結んでゐるのですが、紐だからいつ切れるか判らないので」腕時計の鎖が切れたのを示した。

「直させませう」

「すぐくつつきますか」

「工作科に、器用な兵がゐると思ひますから」と士官は私から時計をうけとると、昇降口をはいつた。

私もつづいた。士官室にくると、

「從兵」と士官が呼んだ。「工作科へいつて、安木一水を呼んできてくれ。たしかあいつ、かういふ仕事が出来たかと思ふから」

「この艦の中に、旋盤工まであるのにはおどろきましたが、時計の修繕も出来るのですね」

「便利な兵がゐます」

安木一水はしやちこばつて、士官のまへに現れた。

「お前、これ、直せるな？ ハンダ附けた。いきなり鎖をつけては時計が傷むから、この鎖の片方をはづして、針か何かで突けばこの心棒は抜けるから、そして鎖につけてくれ。出来るな？」

「はい」

私はそばで恐縮してゐた。このまま半年も一年間も時計の鎖で苦勞するのかと覺悟をきめてゐたが、

「すみませんね」

「いやあ」と應へてから彼は、「敵がソロモン群島のツラギに上陸したこと、いつ聞きましたか」と話をかへた。

「僕らの知つたのは、今朝です」

「昨日の夜おそく無電がはいりました。今朝の哨戒機で敵船團を發見したんですが、米英の大艦隊に輸送船です。ツラギにはわづかの守備隊がゐますが、苦戦でせう。米海軍は英海軍の参加を求めて、濠洲南端から出撃北進してきたものです。南海特有の濃氣とスコールのために、それまで彼らの行動がわからなかつたのですが、敵も必死の反攻ですよ。兵隊を上陸させてしまつたかも知れませんよ」

「それに夜襲をしかけるんですね。しかし、直ちに長官以下出動と、ときばきと作戦をたて、ぐづぐづしてゐないやり方が胸がすくやうに氣持よく思ひます。大分司令部は殺氣立つてましたが」

「大海戦になりますよ、きつと」

「それで實は困るんです。どういふ戦ひになるのか、まるで見當がつかないので……。陸の夜襲戦なら大體見當はつきますが、海の夜襲はこれが初めてなので、どうにも心構へがもてないのです。僕は、こんな海戦になるとは夢にも考へてなかつたのです」

「まづたく突發事件ですからね。しかし、海戦といふものは、たいていかういふ風にお膳立てのできないうちに双方がぶつかるものではないでせうか。勿論氣持の上のことを言つてゐるのですが、いつだつて大なり小なりの突發事件です」

「結局素人の悲しさの一語で、けりがつくのでせうか……」

さういふ話をしてゐると、安木一水が修繕した腕時計を小さい生物のやうにすゑてもつてきた。

「うまくついたか」

「はい」

「ありがたう」と私はうけとつた。腕にとほすと、切れた以前よりも工合よく腕にからみついた。「ありがたう」

「よし」と士官がいつた。安木一水は敬禮をし、士官室の出口で再びこちらを向いて頭を下げて出ていつた。私はお禮がしたくてたまらなくなつた。時計屋に出せば一圓二圓はとられる。鎖の切れた不自由を思へば、安木一水に五圓くらゐのお禮をし

てもよいと思つた。が、金は渡されない。安木一水は上官の命により、切れた鎖をつないだのである。軍人であるなら、それで済む。すまないのは私の娑婆の習慣であつた。せめて金錢でこの感謝をあらはしたかつた。「ありがたう」の一言ですむ世界は現實界からあまりにはなれすぎてゐた。私は苦痛に思つた。拂ふべきものを拂はないである心の重荷を覺えた。あと味が悪いのだ。それほど横着にはふるまへなかつた。しかし兵には一錢といへども渡すことは許されてゐないのだ。さういふ努力に對する報酬の法則は、ここでは許されてゐない。私は金錢を輕視するのではなかつたが、自分の氣持が次第に重くなつていくのは、金錢によつて人生の大部分を處理することに慣れてゐる自分が、この世界ではよくよくの異端者だといふひけめを覺えるからである。さういふ娑婆の匂ひをふんだんにつけてゐるわが身をことさらにふりかへつた。

突然、陸上あたりで砲が鳴つた。續けて三發である。空襲だ。

「戦闘用意」

艦内の擴聲器が呶鳴つた。私は現實にひきもとされた。出航間近に血なまぐさい戦場の匂ひを嗅いだ氣がした。忽ち士官室はからになつた。私は用意してゐた綿を財布から取りだした。綿は扁平になつてゐたが、ほぐすと結構耳の孔をふさいだ。十分とはいへないが、音が遠去かる。それから艦橋の司令塔まで、いくつかの短い階段を昇つていつた。

司令塔のある右舷の見張員のそばから甲板を見下すと、今まで甲板にあふれてゐた兵が、きれいに消えてゐた。港内を走りまはつてゐた内火艇も、急に少なくなつた。味方の戦闘機がと

んだ。

「左三度、三機、味方が基地にかへりつつあります」

左舷の見張員が、大きな双眼鏡をのぞいて呶鳴るやうに言った。緊張がとけた。

「今のは日本機のあやまり。もとへ！」

司令塔でたれかが叫んだ。忽ち甲板に白い兵の姿があふれ出た。どこに今まではいつてゐたのか。内火艇も活氣づいて走り出した。

司令塔の右舷で、副官と顔をあはせた。

「ほかの報道班の連中は、のこつてもらふことにしました」

「どうしたんですか。間に合はなかつたのですか」

「配乗命令の書類が間に合はなかつたのです。かういふとき、あわてて乗りこむと、ろくなことがないと水雷參謀も言つてましたから」

「Y社の二人は、のりこんだのでせう？」

「Y社の連中は、青葉にのりこみました」

「残つた連中は、あきらめ切れないでせう」

「あきらめて貰ふより仕方ありません。しかし戦争は、これだけに限らないのですから」

十〇時四十五分、出港ときまつた。

港内にゐた軍艦が知らぬ間に動きだしてゐた。私の艦も動きだしたが、それと氣が付いた時にはかなりの速力になつてゐた。残つてゐる船の甲板からさかんに帽子をふつて送つた。私も艦内帽を振つた。白い言葉が飛び交ふやうでゐる。清潔な別れの合圖であつた。これから自分らは戦ひ

私は

自分にいひきかせ、帽を高くさしあげて振つた。嚴肅な氣がした。私の胸のなかは何かでひどく均衡がとれてゐた。この感じは豫定せず、またつくつたものでなかつたので、だしぬけにあつたらしい意味を孕んだやうに思つた。

「艦がおよいでゐます」

機關長がそばにたつてゐた。機關長の指差すところをみると、黒いものが脊鰭をみせてかすかに波を破つて進んでゐた。數匹に見えた。私たちと反行してゐた。私には魚といふ感じではなく、黒い動物が波にかくれて泳いでゐるやうに見えた。

第二章

水道を出たあたりには、敵の潜水艦が待ちうけてゐるかも知れない。味方の哨戒機がとんだ。私は甲板の折りたたみの椅子に休んでゐた。海面は驚愕と混亂と絶望をかくして、重い重量感でおだやかにうねつてゐた。強烈な反射があつた。一人の兵がをかもちを下げて、軍醫中尉をさがして歩いてゐた。中尉は私より四つ向うの椅子にゐたがをかもちの一つの箱をうけとると、食慾は少しもおこらない表情で、茶のみ茶碗にいられたごはんに箸をつけ、小皿にいられたおかずを箸をうつした。兵の夕食の試食であつた。おかずは何か、私のところからは見えなかつた。私は敵がひそんでゐる海面を眺め、中尉の試食をちぐはぐな思ひで眺めたりした。

「よし」

中尉は箸箱に箸ををさめて言つた。兵はをかもちを左手に下げ、しやんとして敬禮をした。